HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成と対訳パターン
著者	桃内，佳雄
引用	北海学園大学工学部研究報告，32：181-202
発行日	2005-02-21

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成と対訳パターン

桃　内　佳　雄*

Translation Patterns and Structures of Ainu and Japanese Noun Phrases with Verbs

Yoshio MOMOUCHI*

あらまし

連体節修飾名詞句は，動詞または形容詞を含む連体節とそれにより修飾される名詞から構成される名詞句である。アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成について比較対照的な考察を進め，機械翻訳システム構築のための基礎として，アイヌ語・日本語対訳パターンの構成を試みる。また，アイヌ語から日本語への直接翻訳において連体節に含まれる動詞の単語直接翻訳を自然な日本語へ変換する処理について基礎的な考察を行う。

1．はじめに

連体節修飾名詞句は，動詞または形容詞を含む連体節とそれにより修飾される名詞から構成される名詞句である。本報告では，アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成について比較対照的な考察を進め，機械翻訳システム構築のための基礎として，アイヌ語と日本語の対照的な対訳パターン，そしてアイヌ語から日本語への直接翻訳において連体節に含まれる動詞の単語直接翻訳を自然な日本語へ変換する処理について基礎的な考察を進める。

連体節修飾名詞句の基本的な構成を日本語の簡単な例でみてみよう。

<u>私が書いた</u>　<u>本</u>

連体節　　被修飾名詞

連体節は，名詞を修飾する，動詞または形容詞を述語とする節である。上の例では，「私が書いた」が連体節である。「本」が修飾される名詞で，これを被修飾名詞と呼ぶ．そして，全体の構成を連体節修飾名詞句と呼ぶ．この連体節では，述語は「書いた」であるが，述語の形とし

＊北海学園大学工学部電子情報工学科
＊Department of Electronics and Information Engineering, Faculty of Engineering, Hokkai-Gakuen University

て，次のような四つの形が基本形である。

	テンス	；アスペクト	
私が書く　本	（非過去（未来）	；未完了	：これから書く本）
私が書いた　本	（過去	；完了	：すでに書き終わっている本）
私が書いている　本	（非過去（現在）	；継続	：現在書き進めている本）
私が書いていた　本	（過去	；継続	：過去に書き進めていた本）

一般に，連体節に含まれる述語のテンス，アスペクトの違いによって，名詞句全体の意味が異なってくる。

アイヌ語から日本語への翻訳を考えるとき，アイヌ語の動詞にはテンスとアスペクトに依存した語形変化がない，テンスやアスペクトを表現する語句は存在しているが，連体節の中では文脈に依存して省略されることが多いといった特徴を考慮する必要がある。次に示すのは，連体節修飾名詞句を含む［アイヌ神謡集：知里幸恵（1923年［大正12年］出版）］からの例である。「アイヌ神謡集」からの例は，切替［2］における「改めた表記法のテキスト」を参照している。また，番号付けを＜Y・・・＞という形で行っている。単語直接翻訳と原著訳を付してある。

＜Y488＞ yayan　aynu　pito　are　ku　ne　kuni　ci　ramu　wa,
ただの　人間　人　仕掛ける　弓　である　と　私　思う　て
［たゞの人間が仕掛けた弩だと思つて］　：　[ ]は原著訳を示す。

助詞を補い，名詞を複合した形での日本語は次のようになる。

ただの　人間が　仕掛ける　弓　であると　私は　思って

連体節のテンスとアスペクトは，文脈に依存して，過去と完了であると推論されるので，「仕掛ける」を次のように変換するほうが日本語として自然である。

ただの　人間が　仕掛けた　弓　であると　私は　思って

この例のように，アイヌ語では文脈に依存して表出されていないテンスやアスペクトに関わる意味を日本語では表出する必要がある場合がある。上の例のすぐ近くに次のような例がある。

＜Y438＞ ainu　pito　are　wa　an　ku　ci　hecawere,
人間　人　仕掛ける　て　いる／ある　弓　私　はずす
［人間が弩を仕掛てあるのをこはして］

この例では，アスペクトを表す「wa an」という表現が動詞「are」に続いており，これは日本語の直接翻訳としては，「ている」または「てある」が対応している。「ている」は動きの継続の状態を表す用法と動きの結果の状態を表す用法がある。「てある」は動作の結果としての対象の状態を表す［益岡・田窪［22］］。この例は，人間が弓を過去のあるときに仕掛けて（物語中での）現在もその弓の状態が継続しているという意味と解釈される。原著訳では「てある」と

なっているが，「てあった」も可能のように思われる。

人間が　仕掛けてある　弓を　私は　はずし，

人間が　仕掛けてあった　弓を　私は　はずし，

このように，アイヌ語では，意味，文脈そして知識に依存して，テンスやアスペクトに関する情報の表出が制御される。従って，アイヌ語から日本語への直接翻訳において，連体節に含まれる動詞の単語直接翻訳をテンスやアスペクトに関して自然な日本語の表現に変換するための，文脈や知識に依存した意味的・語用論的な処理について考える必要がある。

さて，上の例のアイヌ語と日本語の名詞句の対照的な構成を一般化して次のようなパターンとしてまとめることができる。このようなパターンを対訳パターンと呼ぶことにする。

ainu pito are　　ku　：　人間が仕掛けた　　弓

［<他動詞節（－目）><名詞・目>：<他動詞節（－目）><名詞・目>］

連体節の動詞「are」は他動詞で，連体節には主語「ainu pito」は存在しているが目的語が欠けている。目的語の欠落を「－目」と表記している。そして，目的語が被修飾名詞（ku）という構成である。アイヌ語も日本語も同じ構成で対応している。このように，アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成を一般化して対訳パターンという形でまとめることは，アイヌ語と日本語の対照的な考察とアイヌ語と日本語の機械翻訳システムの構築のための有用な知見をもたらすものと思われる。

本報告では，まず，アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成について，比較対照的な考察を進める。その結果を踏まえて，機械翻訳システム構築のための基礎として，連体節修飾名詞句のアイヌ語・日本語対訳パターンをまとめる。そして，最後に，上で例を示したような，連体節中の動詞の単語直接翻訳からテンスやアスペクトを自然な形で表現する日本語への変換処理について基礎的な考察を行う。

本報告におけるアイヌ語表記は文献［1］に依拠している。また，アイヌ語の例，アイヌ語の語彙や文法については，文献［2～11］を参照している。

2．連体節修飾名詞句の基本的な構成

2.1　日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成

日本語の連体節修飾名詞句については，いくつかの視点から多くの研究が行われている［13～23］。本節では，寺村［19］に基づいて，益岡［21］も参照しながら，日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成についてまとめる。寺村［19］は，連体節修飾名詞句を，連体節（寺村［19］では「修飾部」）と被修飾名詞（同じく「底の名詞」）が「内の関係」と「外の関係」にある名詞句に分類する。奥津［13］はそれぞれ同一名詞連体，付加名詞連体と呼んでいる。

①内の関係：付加的修飾：被修飾名詞が連体節に含まれる動詞と格関係にある。

（寺村［19］:底の名詞は，修飾部の用言に対して補語と考えることのできるような関係を内在している。）

②外の関係：内容補充的修飾：被修飾名詞が連体節に含まれる動詞と格関係になく，連体節が被修飾名詞の内容を補充する関係にある。内容の補充のしかたによって「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分けられる。

（寺村［19］:底の名詞にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができない。… 底の名詞は … 修飾部の外からきたものだ …）

まず，「内の関係」にある連体節修飾名詞句の例をみてみよう。

<J1>ちらちらとふる雪は，ぬれた地面に落ちて，ジュッともいわないで消えてゆく。

<J2>いせいよくよびこみをしている父もすきだったが，むかしどおり，もの静かな父も，ふき子はすきだった。

<J3>子どもが手放した風船が，ふわふわと空に飛んでいっているだけだった。

上の例文に含まれる，下線を引いた部分が連体節修飾名詞句の例である。それぞれの名詞句で連体節と被修飾名詞は次のようになる。

		連体節	被修飾名詞
ちらちらとふる雪	：	ちらちらとふる	雪
ぬれた地面	：	ぬれた	地面
いせいよくよびこみをしている父	：	いせいよくよびこみをしている	父
むかしどおり，物静かな父	：	むかしどおり，物静かな	父
子どもが手放した風船	：	子どもが手放した	風船

述語のテンスとアスペクトは，意味的・語用論的に，それぞれ最も自然な形で表現されていると思われる。この自然な表現形の生成をどのように制御するかが問題である。また，上の例はすべて，次のように，文として開くことができる。

雪がちらちらとふる	：被修飾名詞	：が格	：ふる［自動詞：～が］
地面がぬれた	：	が格	：ぬれる［自動詞：～が］
父がいせいよくよびこみをしている	：	が格	：する［他動詞：～が　～を］
父はむかしどおり物静かだ	：被修飾名詞	：が格	：物静かな［形容詞：～が］
子どもが風船を手放した	：	を格	：手放す［他動詞：～が　～を］

上の例の動詞，形容詞のが格，を格は必須格である。必須格としての，が格，を格，そしてに格については，それを被修飾名詞として「内の関係」にある名詞句を構成することができるであろう。しかし，それ以外の格も含めて，動詞と格関係にあるすべての名詞を被修飾名詞として，「内の関係」にある名詞句を作ることができるとは限らない。また，被修飾名詞は実質名

詞であることが要求される［寺村［19］］。

ここで，寺村［19］が「内の関係」の短絡として述べている連体節修飾名詞句について補足する。

頭ノヨクナル本

上の例について，寺村［19］は，『底の名詞「頭」は，それにいろいろな格助詞をつけてもそれだけでは修飾部「頭ノ（＝ガ）ヨクナル」とは結びつかない。しいていうとすれば，「（コノ）本デ」であろうが，もっと自然なのは，先にも記したように，

コノ本ヲ読メバ頭ガヨクナル。

という文と対応させることだろう。』と述べ，このような短絡の表現が成り立つ条件について提案し，このような結びつきを次に述べる「外の関係」のカテゴリに入れてしまうことにも難点があると述べている。これについて，益岡［21］は，寺村の提案に基づきながら，『主名詞（被修飾名詞:「本」）が有する語彙情報に基づいてそれに結びつく動詞（「読む」）とそれに関係する語句が省略される表現のことであり，そのような短絡が起こっても主名詞の語彙情報から省略部分を復元することができるという性格のものである』とまとめている。これは，次のように段階的に構成される連体節修飾名詞句として考えれば，「内の関係」とすることができるであろう。連体節が単文相当節でなくて，複文相当節として構成されていて，被修飾名詞はその複文相当節の副節の格要素である。この副節も連体節の内にある。そしてこれが省略される。

この本を読めば頭がよくなる

　これを読めば頭がよくなる本

　　頭がよくなる本

次に，「外の関係」にある名詞句の例をみてみよう。「ふつうの内容補充」は，連体節が被修飾名詞の内容そのものを表すものをいう。被修飾名詞は［コト性］を持ったものでなければならない［寺村［19］］。

<J4>村の人たちは，少年の言うことをうそだと思って，助けに行かなかったという話です。

<J5>パンパンと，手をたたく音も聞こえる。

<J6>赤んぼう貝は，まだ村をつくる気持ちはないのです。

被修飾名詞は，発話・思考の名詞，「コト」を表す名詞（事実，話，結果など），感覚の名詞（姿，形，色，音など）で，多くの例を示して，この順に連体節の陳述の度は減ってゆくとしている。

「相対的補充」は，連体節が被修飾名詞と相対的な関係にある名詞の内容を表すものである。

<J7>和製英語も，外来語が造語力を持ち始めた結果だと思われます。

<J8>私に気づかう前に，人の住める土地を取りもどしてくれ。

連体節が述べている内容と因果関係，時間的前後関係，空間的前後上下左右関係などの相対的な関係にある意味を持った名詞が被修飾名詞となる。「ふつうの内容補充」からさらに陳述の度が減って，単なる叙述内容，propositionになっていく様子が見られるとしている。

益岡［21］は，「ふつうの内容補充」の修正と［相対的補充］の捉え方を［縮約］という考え方を導入して修正することを提案している。例えば，「魚を焼く匂い」は「魚を焼く【ことから生じる】匂い」の【ことから生じる】を縮約した形と考える。連体節と被修飾名詞の意味的関係を表す語句が潜在化しているものと見て，このような節を「縮約節」と呼ぶことを提案している。このような潜在化していると見られる語句として，「ことから生じる／得られる」，「という」，「ところの」，「ための」，「だけの」，「ときの」，「ことに対する」，「ことの」などをあげ，縮約節の下位分類を進めている。これは，連体節に語句が付加されるということで，先の「内の関係」の短絡とは区別されるべき関係であると思われる。

寺村［19］は，底の名詞の形式化について考察を進めている。ここで論じられる底の名詞（被修飾名詞）は，［ところ］，「こと」，「もの」などの名詞で，その範疇は，日本語の形式名詞と呼ばれる範疇と大きく重なる。

<J9>ぼくは，自分の山小屋にもどるところでした。

<J10>これで，自分の正体がばれてしまったことも気づかずに，話し続けました。

<J11>しかも，一人一人が，楽しみながら緑を増やすことができるようにしようとするものでもあります。

上の例では，連体節が文としてのまとまりを有していて，被修飾名詞は，文を名詞化する働きをしていると考えることができる。その意味で，特に，「こと」は，「の」と併せて，名詞化辞とも呼ばれている。ただし，これらの名詞は，実質的な内容を持って，「内の関係」にある名詞句にも出現することがある。

<J12>ところが，小屋に帰って，ぼくがいちばん先にしたことは，なんだったでしょう。

［ぼくがいちばん先に　（その）ことを　した］

「内の関係」と「外の関係」の分類は，装定と述定の置き換えが可能かどうかという基準による，名詞から動詞へという観点からの分類ということができる［澤田［16］］。

高橋［17］は，日本語の連体動詞句について，連体動詞句から（被修飾）名詞への関係の仕方という観点から，連体動詞句と（被修飾）名詞との意味的な関係について考察を進めている。ここでは，高橋［17］の研究をまとめた澤田［16］を参照する。連体動詞句から（被修飾）名詞への主な関係を関係づけ，属性づけ，内容づけ，特殊化，具体化の五つのかかわりとしてまとめているが，始めの二つについてみてみよう。

①関係づけのかかわり：「動詞句は一定時間での動作を表す」

動詞句で示されている事柄が時間軸上に局在する出来事・動作であり，（被修飾）名詞は時

間的にその事柄と次の三つのいずれかの関係のもとにかかわる事物を示すことになる。

・先行性のかかわり　[事柄に先行してかかわる事物]

・同時性のかかわり　[事柄と並行してかかわる事物]

・後続性のかかわり　[事柄に後続してかかわる事物]

これらの三つの時間軸上での時間的なかかわりをベースとして次のような具体的なものや状況とのかかわりが設定される。

・参加者のかかわり：主体のかかわり（が格），直接的な客体のかかわり（を格）

・状況のかかわり　：場所のかかわり（で格），時間のかかわり（ϕ）

・後続者のかかわり：結果のかかわり，生産物のかかわり，応報のかかわり，生じた結果のかかわり（対応する格はなく，装定と述定の置き換えが成立しない［外の関係］）。

②属性づけのかかわり

動詞句の動詞はテンスまたはテンス・アスペクト両者の意味の対立を持たない。動詞句の動詞は時間軸上のどこかに位置づけられる運動を意味してはいない。装定と述定の置き換えが可能である。しかし，動詞句の動詞が特定時の動作を示していないため，「関係づけのかかわり」の場合とはその性格を異にしている。

連体節を動詞句に限って議論を進めている。関係づけのかかわりは，動詞句で記述されている事態が時間軸にそって位置づけられ，また，その事態に関わるものや状況が時間の流れの中に位置づけられて，被修飾名詞として取りだされるということである。動詞句に含まれる動詞のテンスやアスペクトの決定は，文脈，特に時間的な文脈に基づいて行われることになるであろう。一方，属性づけのかかわりでは，動詞句に含まれる動詞は時間軸に沿った事態としては位置づけられていない。従って，そこにはテンスを意味する情報は含まれないということになる。

2.2　アイヌ語の連体節修飾名詞句の基本的な構成

アイヌ語の連体節修飾名詞句は，基本的な構成はほぼ日本語と同じである。連体節の構成に関わる注意点として，形容詞という品詞範疇が設定されていず，日本語の形容詞に相当する単語は，自動詞という範疇に分類されるということがある。そのことを前提にして，アイヌ語の動詞は次のような範疇に分類される［田村［7］］。

・完全動詞（それ自身の中に主語（「. . . が」を表す要素）と述語（[. . . する］を表す要素）を内蔵し，他に主語も目的語もとらない）

・自動詞（主語（「. . . が」を表す語）をとるが，目的語（「. . . を／. . . に」を表す語）も補語（その主語がなんであるかを表す語）もとらない）

・他動詞（主語と目的語をとる）

・デアル動詞（主語と補語をとる）

・複他動詞（主語と二つの目的語（「. . . を」と「. . . に」）をとる）

・連他動詞（連動詞)(目的語をとる名詞と他動詞との連語構成で，主語と目的語をとる）

・連複他動詞（連語構成で，主語と二つの目的語をとる）

ここでの主語と目的語は動詞の結合価パターンにおける必須格要素として設定されている。アイヌ語においては，動詞がとる必須格要素の数は，項数として，動詞ごとに統語論的に明確に規定することができ，この項数に着目して，自動詞は１項動詞，他動詞は２項動詞，複他動詞は３項動詞などとも呼ばれる［中川［8,9]]。必須格以外の補足的な格要素は，動詞の結合価パターンに依存して格助詞を伴って表出される。副助詞「anak（anakne)」(日本語の副助詞「は」にほぼ対応する）を伴って，格要素を話題として取り立てることができる。

＜U１＞ iyotta pase kamuy anakne kimun-kamuy ne.

１番 尊い 神様 は 山の神 です。

pase：自動詞（１項動詞)[～が：尊い]

＜U２＞ cise soyke ta hekattar ciros ani pewrep cotca siri ku=nukar wa

家 の外 で 子供たち 花矢 で 子熊 射る 様子 私＝見る て

cotca：他動詞（２項動詞)[～が，～を，(弓で)：射る]

アイヌ語の助動詞の一部を次に示す。

・a（た)，rok（た：複数)[過去・完了の意味]

・rusuy（たい)，nankor（だろう)，ranke（ながら)，kaspa（すぎる)，・・・

動詞の助動詞的用法もあり，その一部を次に示す。

・easkay（～できる)，eaykap（～できない)，

また，アスペクトに関わる次のような連語もある。

・wa an（ている：変化や行為の結果の状態にあることを表す。[中川［８]])

・kor an（ている：動作や変化が進行中であることを表す。[中川［８]])

以上のような動詞，助動詞，そして名詞を基本構成要素として連体節修飾名詞句が構成される。

連体節修飾名詞句の例をいくつかみてきたが，アイヌ語の連体節修飾名詞句については，名詞句全体の構成についての考察の中で，田村［６］が基本的な構成をまとめている。切替［３］は，動詞を含む名詞句である修飾構造，そして擬似修飾構造と合成名詞についての考察を進めている。本節では，これらの研究を参照して，アイヌ語の連体節修飾名詞句の基本構成について検討する。まず，田村［６］による基本的な連体節修飾名詞句の構成について以下に示す。

『ii）連体語＋名詞（句）

オ）動詞句／節

・＜自動詞＞　pirka isoytak　　cf. isoytak pirka.(isoytak　は主語)
　　美しい　話　　話が　美しい

・＜デアル動詞＞　a=unuhu ne tonomat　　cf. ne tonomat a=unuhu ne.
　　私の母 である 奥方　　その 奥方は 私の母 だ

・＜他動詞＞　e=se　　yam　　cf. yam　e=se.　　(yam　は目的語)
　(あなたが) 背負っている　栗　　栗を (あなたが) 背負う。

・＜所属形＞　cikirihi tanne kikir　　cf. kikir cikirihi tanne.
　　その足 長い 虫「足の長い虫」　　虫　の足が　長い

・＜位置名詞＞　ene　　oka　tumunci kamuy　oro　ta　oka　to
　　そのように　ある　鬼神が　　そこ　に　いる　沼
　　「そのような鬼神のいる沼」
　　cf. ene oka tumunci kamuy　to or ta　oka.
　　そのような鬼神が　　沼のところにいる

・＜格助詞＞　ani　　cep　a=ma　ya
　　それで　魚を　焼く　網　　「魚焼き網」
　　cf. ya　ani　cep　a=ma.
　　網　で　魚を　焼く

・・・

一方，連体語の後でのみ名詞として機能する語もある。

pe／p「もの」，kur「人」，uske「所」　などがそうである。

iv）文＋名詞化辞

～　hi　「～こと」，～　ruwe　「～の」　』(一部追加(＜＞で括った語句)，一部省略)

＜所属形＞は，連体節の中に，被修飾名詞と関連する所属形の名詞が存在している。＜位置名詞＞は，連体節の中に，被修飾名詞の代用となる表現としての位置名詞が置かれている。また，＜格助詞＞は，被修飾名詞が主語，目的語以外の任意の格で連体節の動詞と関わり，対応する格助詞が連体節の中に残されている。すなわち，これら三つは，いずれも被修飾名詞と連体節の中の要素の間の関係を示す手がかりが連体節の中に明示的に残されているということができる。

名詞化辞は，『文の後におかれて，これを名詞句に転換する語』として規定されている。『名詞化辞の中には，独立性の弱い，助詞とみられるものもあるが，一方，前の部分との統合関係が切れて文頭に現れうる，独立性の強いものもある。』として，独立性の強いものとして次の四つをあげて，多くの場合長いほうの形が用いられるとしている。

・ru, ruwe　語源としては，cf. ru（概念形），ruwehe（所属形）「通った跡，道」
・haw, hawe　cf. haw（概念形），hawehe（所属形）「声」
・hum, humi　cf. hum（概念形），humihi（所属形）「音，感じ」
・sir, siri　cf. sir（概念形），sirihi（所属形）「様子」

また，独立性の弱い，助詞と見られる「名詞化助詞」(略して「名助詞」）として次のようなものをあげている。これは上の分類でも，ii）オ）の最後のところで言及されている。

・uske, uske（he）「ところ，とき」　・kur「人，男の人」
・pe／p「もの，こと」　・hi「こと，とき，ところ」
・hike「～の，～ほう」　・yak 間接引用「～（した）ということ」
・kuni, kunak 間接引用「～するということ」

切替［3］は，アイヌ語の連体節修飾名詞句を修飾構造と擬似修飾構造に分類している。切替［3］に従って，本報告における用語を一部併用しながら，検討を進める。

［1］修飾構造：修飾句（本報告での連体節）が，それがあることによって文が完成するような名詞的要素を一つ欠き，その欠けているものを被修飾語とするような名詞句を修飾構造をなすという。上の関係にある文をその名詞句に［相当する文］と呼ぶ．修飾構造では，名詞句は相当する文と等しい要素からなり，被修飾語がいかなる文構成要素に相当するかが修飾句（連体節）から（形の上で）明らかになる［切替［3］]。

＜1＞被修飾名詞が連体節動詞の一次的構成要素（主語，目的語相当要素）である構造

①自動詞・主語相当要素

＜K1＞hoskino ek menoko
先に　来る　女

②主語・他動詞・目的語相当要素

＜K2＞ci　oan-ruki　rerek　aynu
私が　すっかり・飲み込んだ　やせた　男

＜K3＞Okikirmuy　e-ak　pon　ay
オキキリムイが　射た　小さな　矢

③目的語・他動詞・主語相当要素

＜K4＞un　ure-e-yaku　sirun　menoko
私を　足・で・つぶした　汚ない　女

＜2＞被修飾名詞が二次的構成要素（単独では動詞と関係できず，連体節の中に格助詞，名詞所属形などを必要とする要素）である構造（上に示した田村［6］による分類の＜所属形＞，＜位置名詞＞，＜格助詞＞に対応している。）

①連体節の中に格助詞が置かれていて，被修飾名詞がそれに係る。

＜K５＞ari　　a nuye　　kor okay　unuypa　　wakka

～で　（彼女が）いれずみされ　て　いる　いれずみ（の）水

②連体節の中に名詞所属形が置かれていて，被修飾名詞がそれに係る。

＜K６＞nici（hi）　takne op

～の柄（が）　短い　槍

［２］擬似修飾構造

擬似修飾構造をどのように規定するかは，具体的な例を検討した後で示す。まず例をみる。

＜１＞主語・目的語相当要素以外の要素が被修飾名詞となる構造

①自動詞・二次的構成要素

＜K７＞kimun　kuwa

狩をする・杖

＜K８＞sinot　ay

遊ぶ・矢

一般に二次的構成要素を修飾する自動詞には主語がつかない。

②目的語・他動詞・二次的構成要素

＜K９＞ape　　nomi tuki

火（の神）（に）・祈る・盃

＜K10＞sake　　kar　sintoko

酒（を）・造る・樽

＜K11＞cise ka ranke p

家（の）・上（を）・下ろす・もの（屋根の雪下ろし用具）

＜K12＞muy sapte p

ごみ（を）・出す・もの（ほうき）

＜K13＞i ma nit

それを・火にあぶる・串

上の①，②の例は，被修飾名詞が動詞の表す行為に伴って用いられる道具を表していると考えることができるが，日本語での「内の関係」として格助詞「で」だけを伴う形で表現することには無理があるように思われる。次のような「相当する文」として展開できるであろうか。これは，「内の関係」の短絡の表現といってよいであろうか。

狩をする・杖　：杖をたずさえて　狩をする

遊ぶ・矢　　：矢を用いて　遊ぶ

火（の神）（に）・祈る・盃　：（酒を満たした）盃を捧げて　火の神に祈る

酒（を）・造る・樽　　：樽を用いて　酒を造る

それを・火にあぶる・串　：串を使って　それを火にあぶる

行為のなされる場所を指示している例もある。

＜K14＞i-ku so

それを・飲む・座　：(その) 座で　それを飲む

＜K15＞i-ma san

それを・火にあぶる・棚　：(その) 棚で　それを火にあぶる

他動詞について，次のような構成も考えられ得るが，具体例は見出せなかったとしている。

・主語・他動詞・二次的構成要素

・主語・目的語・他動詞・二次的構成要素

・　　他動詞・二次的構成要素

この結果について次のようにまとめ，擬似修飾構造の規定を行っている。

『これらの仮定上の名詞句は，実際には存在し得ないものと考えられる。以上のことから，擬似修飾構造を次のように規定する：擬似修飾構造は，主語を欠く自動詞的形式と二次的構成要素である名詞との結合である。ここで自動詞的形式とは，「目的語・他動詞」および「i－・他動詞」などを含むものとする。　・・・・・

擬似修飾構造の存在は，名詞句の解釈にあいまいさをもたらすことになる。［自動詞・］とか［目的語・他動詞・］という修飾句がどのような要素を修飾しているか，主語相当要素であるか，二次的構成要素であるか即座には決められないからである。さらに二次的構成要素であれば，それが動詞に対してどのような関係にあるのかが明示されない。』

解釈のあいまい性については，文脈情報を参照しながら文章を漸進的に解釈してゆくしくみの中で，動詞の意味構造（結合価パターン，格フレームなど）の利用も考慮すると，二次的構成要素の解釈のところで，必ずしもあいまいであるとは限らない。例えば，次の例で考えてみよう。アイヌ神謡集［切替［2］］からの例である。

＜Y17＞atuy teksam ta　aynu hekattar　ak sinot pon ku

［海辺に人間の子供たちがおもちゃの小弓に］

人間の子供たちが射て遊ぶ小さい弓

ak：自：～が矢を射る；sinot：自：～が遊ぶ

＜Y18＞ak sinot pon ay　euesinot kor okay.

［おもちやの小矢をもつてあそんで居ります。］

文脈の中に，「aynu hekattar」という名詞句があって，「ak」，「sinot」が処理されるところで，動詞の意味構造（結合価パターンあるいは格フレーム）が利用されれば，その主語が「aynu hekattar」であるという処理が行われるであろう。そうすれば，「ak」，「sinot」にとって，「ku」も「ay」も主語相当要素ではなく，二次的構成要素であるという処理が行われることに

なる。[相当する文] へ転換すると次のようになるであろうか。

人間の子供たちが矢を射て遊ぶ小さい弓：人間の子供たちが小さい弓で矢を射て遊ぶ

修飾構造を連体節と被修飾名詞の間の関係を示す表層的な明示的手がかりが名詞句の中にあるような構造として捉え，それ以外の構造を擬似修飾構造として捉えていると考えられる。従って，擬似修飾構造の名詞句には，日本語に翻訳したときに，主語と目的語相当要素以外を被修飾名詞とする「内の関係」の名詞句も含まれることになる。さらに，日本語に翻訳したときに，「外の関係」の名詞句となる名詞句もその一部を含むことになるといってよいであろうか。

＜Y１・104＞terke as humi　tununitara.

[美しい音をたてゝ飛びました。]

私が飛ぶ音　美しく響く

日本語の名詞句「私が飛ぶ音」は，「外の関係」の名詞句である。

＜Y778＞kanto ot ta　yuk kor kamuy　cep kor kamuy

[天国の鹿の神や魚の神が]

＜Y779＞tanto pakno　yuk somo atte　cep somo atte

[今日まで鹿を出さず魚を出さなかつた]

＜Y780＞ikkewe anak　aynu pito utar　yuk koyki ko

[理由は，人間たちが鹿を捕る時に]

日本語の名詞句「天国の鹿の神や魚の神が今日まで鹿を出さず魚を出さなかった理由」は，「外の関係：ふつうの内容補充」の名詞句である。アイヌ語における『擬似修飾構造は，主語を欠く自動詞的形式と二次的構成要素である名詞との結合』であるので，この例は擬似修飾構造の範疇に収めることはできない。名詞「ikkewe」が名詞化辞でないとすれば，田村［６］による「文＋名詞化辞」の範疇にも収めることができないであろう。擬似修飾構造にも，「文＋名詞化辞」にも納まらない名詞句で，日本語に翻訳したときに，「外の関係」にあるような名詞句がアイヌ語に存在するということになるのであろうか。

３．アイヌ語・日本語連体節修飾名詞句の対訳パターン

本章では，２章までの考察に基づいて，アイヌ語と日本語の連体節修飾名詞句の基本的な構成と対応関係を対訳パターンという形でまとめる。アイヌ語と日本語の基本的な対訳パターンを次のように表記する。

[＜アイヌ語パターン＞：＜日本語パターン＞]

［１］連体節修飾による名詞句＜１＞（cf. 修飾構造：切替［３］）

① [<自動詞><名詞・主>:<形容詞><名詞・主>]
[pirka isoytak T: 美しい 話]
② [<自動詞><名詞・主>:<自動詞><名詞・主>]
[yar amip U: ほころびた着物]
③ [<デアル動詞節(−主)><名詞・主>:<デアル動詞節(−主)><名詞・主>]
[a=unuhu ne tonomat T: 私の母である奥方]
④ [<他動詞節(−主)><名詞(句)・主>:<他動詞節(−主)><名詞(句)・主>]
[un=ureeyaku sirun menoko Y: 私を踏みつぶしたにくらしい女]
⑤ [<他動詞節(−目)><名詞・目>:<他動詞節(−目)><名詞・目>]
[a=satke cep E: (だれかが)干した魚]
⑥ [<複他動詞節(−目)><名詞・目>:<3項動詞節(−目)><名詞・目>]
[isepo k=ere kina U: ウサギに私が食べさせる草]
⑦ [<複他動詞節(−主)><名詞・主>:<3項動詞節(−主)><名詞・主>]
[(例未見)]

{ 主:主語相当要素,目:目的語相当要素[切替[3]]
(−主):主語相当要素を欠いている;(−目):目的語相当要素を欠いている
<名詞・主>:主語相当要素名詞;<名詞・目>:目的語相当要素名詞 }

中川[9]によれば,基本形で項数が3の複他動詞は,「o:〜が〜に〜を入れる」一つである。⑥の例の複他動詞は,動詞の基本形に接辞が付加されて構成されたものである。

ere:e(他動詞)+re(使役形形成接尾辞):食べる(他動詞)+させる(使役形形成助動詞)

この構成は日本語でも,使役形形成助動詞がついた形となっていて,アイヌ語も日本語も動詞概念を派生形として捉えている。これに対して,次の例では,アイヌ語は派生形で,日本語は派生形ではない一つの動詞として捉えている。

kore:kor(他動詞)+e(使役形形成接尾辞):与える(他動詞)
持つ させる (持たせる)

アイヌ語の複他動詞にはどのようなものがあるのだろうか。田村[7]と中川[8]を参照して,田村[7]による複他動詞と中川[8]による3項動詞はどのように関連しているかについて少し考えてみよう。中川[8]の3項動詞のほうが広く3個の格要素をとる動詞を捉えている。主語(が格),目的語(を格・に格)以外の格要素をとる3項動詞はいろいろ存在する。田村[7]は,その定義では目的語を二つとる動詞としているが,田村[7]の中の具体的な例としては,を格,に格以外の格要素を含めて3項を数えている。つまり,中川[8]の3項動詞と同じように考えている。また,アイヌ語には,接頭辞e,koを付加することによって,格要素の項数を一つ増やす動詞派生のしくみがある[切替[5],中川[9]]。

epakasnu（e+paksnu）：～に～を教える（～について＋～を教える）

kouk（ko+uk）：～から～を奪う（～に対して＋～をとる）

［2］連体節修飾による名詞句＜2＞（cf. 修飾構造：切替［3］）

①［＜自動詞節（＋主・所属形）＞＜名詞・の格＞：＜形容詞節（＋主）＞＜名詞・の格＞］

［ cikirihi tanne kikir　　T：その足が長い虫　　］

②［＜自動詞節（＋位置名詞）＞＜名詞・ta格＞：＜自動詞節＞＜名詞・に格＞］

［ ene oka tumunci kamuy oro ta oka to　　T：そのようにある鬼神がそこにいる沼］

③［＜他動詞節（＋ani）＞＜名詞・ani格＞：＜他動詞節＞＜名詞・で格＞］

［ ani cep a=ma ya　　T：　魚を焼く網　　］

前述したように，日本語では，主語（が格），目的語（を格，に格）も含めて，連体節の動詞の格要素を被修飾名詞とする関係は「内の関係」と呼ばれている。主語，目的語については，［1］でまとめた。［2］の①や②のように日本語でも，指示詞（「その」，「そこに」）を連体節の中に残して「内の関係」を明らかにする手段がある。［2］の③の例は，日本語では，主語，目的語以外の格要素についての「内の関係」の例で，アイヌ語では，このような場合，格助詞を連体節の中に表層的な手がかりとして必ず残さなければならないのであろうか。次のような例がある。

＜Y1012＞pon rupnekur kor　　uray　kik　tuci

［小男の持つてゐる　杭を　打つ　槌］（　小男の持っている槌で杭を打つ　）

これは，日本語の述定の形で考えると，被修飾名詞は③の例と同じ「で格」（道具格）である。アイヌ語の「kik」は他動詞で，主語と目的語をとるが，「で格」は二次的構成要素である。格助詞を残すことなく連体節修飾名詞句が構成されているといってよいのであろうか。

［3］連体節修飾による名詞句＜3＞（cf. 擬似修飾構造：切替［3］）

①［＜自動詞＞＜名詞・二次＞：＜形容詞＞＜名詞・二次＞］

［（例未見）　：　　］《悲しい（気持ちで飲む）酒，（貰って）うれしい金メダル》

②［＜自動詞＞＜名詞・二次＞：＜自動詞＞＜名詞・二次＞］

［ kimun kuwa：狩をする杖　K］

③［＜自動詞節（＋主）＞＜名詞・二次＞：＜自動詞節（＋主）＞＜名詞・二次＞］

［ komuni ran cup　［切替［3］アイヌ語のただ一つの例］：　どんぐりが落ちる月］

④［＜他動詞節（－主，＋目）＞＜名詞・二次＞：＜他動詞節（－主，＋目）＞＜名詞・二次＞］

［ sake kar sintoko　　K：酒を造る樽］《魚を焼くにおい；たばこを買ったおつり》

⑤［＜他動詞節（＋主，－目）＞＜名詞・二次＞：＜他動詞節（＋主，－目）＞＜名詞・二次＞］

［（切替［3］アイヌ語ではみあたらない。）］《太郎が学んだ自動車学校》

⑥［＜他動詞節（＋主，＋目）＞＜名詞・二次＞：＜他動詞節（＋主，＋目）＞＜名詞・二次＞］

[(切替［3］アイヌ語ではみあたらない。)]《太郎が階段を上る足音》

⑦［<他動詞節(－主，－目)><名詞・二次>：<他動詞節(－主，－目)><名詞・二次>]

[(切替［3］アイヌ語ではみあたらない。)]《話す機会》

《 》は，日本語の作例である。文脈に依存した表現で，どのようなアイヌ語訳が対応するだろうか。アイヌ語について，①の例はどうなのだろうか。また，⑤，⑥，⑦の例は，真に存在しないのであろうか。二次的構成要素を，前述した田村［6］による名詞化辞まで広げて考えると，次のような例が見られる。

①：<E> keraan humi ：おいしい感じ

③：<Y> kamuy ikor tuy hum ：神の宝物が落ちる音

⑤：<Y> kamuy e rusuy pe ：神が食べたいもの

⑥：<Y> nea ku oro ci osma humi ：その弓のなかに私がはまる音

他動詞「kik」に補充接頭辞「e」を付加して派生される複他動詞「ekik」の例がある。

<Y11－57>kimun iwa iwa kurkasi ci ekik humi

山の岩 岩の上に 私が彼を打ちつける 音

[山の岩の上へ彼を打ちつけた音]

［4］連体節修飾による名詞句<4>［文＋名詞／形式名詞（名詞化辞）cf. 田村［6]]

①［<文><名詞化助詞>：<文><形式名詞>]

kur（人）／uske（ところ，時）／pe,p（もの，の，こと）／hi（こと，とき，ところ）

[Sasaki nispa ikuruy kur ne. E： 佐々木さんは酒好きである人だ。]

[ku=hotke hi ta U： 私が寝るときに]

[numaha hure p anak a=sitoma p ne ruwe ne korka U：

体毛が赤いものは人が恐れるものであるのだけれど]

②［<文><名詞化辞>：<文><名詞>

ruwe（通った跡，道），hawe（声），humi（音），siri（様子）

[nea ku oro ci osma humi Y： その弓のなかに私がはまる音]

[ekasi kor makiri ku=yupi eywanke siri ku=nukar. E：

おじいさんの小刀を私の兄が使う様子を私は見た。]

③［<文><位置名詞>：<文><相対名詞>]

okake（後），etok（前）

[ku=kor totto mame etoyta okake wa ku=kema ani k=otoypukka. U：

私のお母さんが豆を植えた後から私の足で土寄せをした。]

④［<文><内容名詞>：<文><内容名詞>]

oruspe（事柄，話，噂），

[tanpe anakne ku=kor unarpe en=nure oruspe ne.　U：
これは私のおばあさんが私に聞かせた話です。]

・形式名詞，位置名詞（相対名詞），内容名詞が完全な＜文＞によって修飾されるとは限らない。

[tane kinaemauri ci wa a=e uske ne.　T：今ヤマソバが熟して食べる時期だ。]
＜目的語が省略されている＞

［5］連体節修飾による名詞句＜5＞

①助動詞の付加

[seta sirkunne yakka inkar easkay pe ne.　U：
犬は暗くなっても見ることができるものである。]

②複合的な埋め込み構造

[un=ureeyaku sirun menoko　K：　私を足でつぶした汚い女]

4．連体節における動詞の翻訳処理

アイヌ語から日本語への翻訳を考えるとき，前述したように，アイヌ語の動詞には，テンスとアスペクトに依存した語形変化がなく，テンスやアスペクトを表現する語句は存在しているが，連体節の中では，文脈に依存して省略することが多いという特徴を考慮する必要がある。1章でも例を示したが，ここで，さらにいくつかの例についてみてみよう。

＜Y385＞okikirmuy　eak　pon　ay　ek　a　ine
オキキリムイ　射る　小さい　矢　来る　た　して
[オキキリムイの射放した矢が飛んで来たが]

格助詞を補った形での日本語は次のようになる。

オキキリムイが　射る　小さい　矢が　来る　た　して

動詞「射る」について，テンスあるいはアスペクトを表す助動詞などが表現されていないので，変換の処理を考えなければならない。基本的な形は，次の4通りである。

	テンス	アスペクト
[a] オキキリムイが射る小さい矢	非過去（未来）	未完了
[b] オキキリムイが射た小さい矢	過去	完了
[c] オキキリムイが射ている小さい矢	非過去（現在）	継続
[d] オキキリムイが射ていた小さい矢	過去	継続

連体節修飾名詞句を含む節を母節と呼ぶことにする。物語が過去の出来事として語られているという文脈に依存して，テンスは過去，アスペクトは完了であるとするのが最も優先的である

と思われるので，次のように変換するのが自然である。

オキキリムイが　射た　小さい　矢が　来たところ

母節末尾の「ek a ine」について，切替［2］では次のように記述している。

ek：［一項動詞］～が来る。

a：［助動詞］(行為が既に行われたことを示す。接続助詞の前に置かれ，前文の行為が後文の行為より前に行われたことを示す。

ine：［接続助詞］…して.

a ine：…しているうちに；…していると，その結果

「a」はテンスとして過去を意味する語で，「ine」はアスペクトとして継続の意味を含んでいる。「a ine」の原著訳は「たが」となっているが，ここでは「たところ」としている。母節のテンスが過去であるということが，連体節の「射た」の妥当性を確認する情報となる。

さらに上の例で，アイヌ語では自動詞である「pon」の単語直接翻訳である日本語の形容詞「小さい」は，「ay：矢」が表現する物に付随する，作られたときから変わらない，時間に依存しない属性についての表現である。一般に，時間に依存しない属性はテンスとアスペクトに依存して変化しないと考えられる。これは，属性的なかかわりである［澤田［16]]。しかし，次のような例では，「pon」は人間の成長に伴う時間に依存した状態の表現と考えられる。従って，「小さかった」という表現への変換が考慮される。しかし，この変換は必然的なものではない。「小さい」という表現も可能であろう。

＜U 4 ＞ku=pon　hi　ta ramma ku=siyeye.

私が小さい　時　に　よく　私が病気する。

［私が小さかった時，よく病気になりました。］

私は小さい時によく病気した。

私は小さかった時によく病気した。

連体節の中で，テンスあるいはアスペクトを意味する表現が表出される場合もある。

＜Y890＞ci　yanke　a　humpe

私　打ち上げる　た　鯨

［私が打ち上げた鯨］

すぐ近くに次のような「a」の付かない表現も現れている。

＜Y8103＞ci　yanke　humpe

私　打ち上げる　鯨

これは，文脈を考慮して，上の例と同じ表現「私が打ち上げた鯨」に変換されるべきであろう。

次に，アイヌ語の動詞の単語直接翻訳からの変換を制御する基本的な要因について検討す

る。

＜U５＞ku=tekehe piro　hi ta,

私の手　傷つく　とき　に

ここで，動詞の単語直接翻訳は「傷つく」であるが，自然な日本語訳としてこの形のままでよいのか，テンスとアスペクトを考慮した別な形に変換すべきかを決めなければならない。基本的な変換形は三つである。

①単語直接翻訳形［る：非過去・未完了］

②変換形　　［た：過去・完了／ている：非過去・継続／ていた：過去・継続］

単語直接翻訳形「る」は，非過去・未完了の意味の表現と考えて，意味的，語用論的に判断して，この意味で正しい時には変換しない。変換に関しての選択肢は，次の三つである。

＜NT＞変換する必要がない場合

＜MT＞変換しなければならない場合

＜OT＞変換してもしなくてもよい場合

例＜U５＞は，主人公が過去の出来事について話を進めているという文脈の中に置かれている。さらにここでの出来事は完了している。それゆえ，「た」に変換する必要がある。

＜U６＞ku=tekehe piro　hi ta,

私の手　　傷つく　　とき　に

私の手が　傷ついた　とき　に

変換を制御する基本的な要因を次のようにまとめる。

＜１＞文脈の時間的な構造

＜２＞物事の属性の時間的な特性

＜３＞事態の時間的な様相

＜４＞文章の記述レベル

それぞれについて具体的な例をみてみよう。

＜１＞文脈の時間的な構造

＜U７＞　sine an to ta k=unuhu turano ekimne k=arpa　hi　ta

ある日　私の母　といっしょに　山へ　私が行く　とき　に

ある日　私の母　といっしょに　山へ　私が行ったとき　に

「ある日」という表現は文脈の中の過去の時点であることを意味している。これは，「昨日」と同じような意味素性を持っていると考えることができる。

＜Y385＞Okikirmuy　eak　pon　ay

オキキリムイ　　射る　小さい　矢

オキキリムイが　射た　小さい　矢

これは4.1節で検討した。過去の物語であるという文脈情報を利用している。

＜２＞物事の属性の時間的な特性

＜U８＞sat esokka ohaw or a=omare wa

乾く かじか 汁 の中に 人が入れ て

乾いたかじかを 汁の中に入れて

「かじか」の変化の結果である状態属性を記述している。「乾いた」か「乾いている」のどちらかであろう。

＜Y649＞a=eoripak Okikirmuy tetekar pe

人が敬う オキキリムイ 手作りする もの

人が敬うオキキリムイが手作りしたもの

［敬ふべきオキ丶リムイの手作りの物］

「オキキリムイ」の属性情報．現在ある属性としての情報．

＜３＞事態の時間的な様相

＜T１＞e=se yam

あなたが背負う 栗

あなたが背負っている栗

今，栗を「背負っている」状態である。これから，「背負う」のではない。また，過去に「背負った」のでもない。文章に記述されている物語の中での現在の状態を記述している。

＜４＞文章の記述のレベル

＜U９＞kamuycep a=suwe hi ta a=osura usi sinep ka isam.

サケ 人が食べる とき に 人が捨てる ところ 一つ も ない

サケを食べるときに 捨てるところは一つもない。

サケを「食べる」ときについての一般的な状況についての記述である。記述のレベルが一般的である。「捨てる」もこのままである。

５．おわりに

日本語の連体節修飾名詞句について，寺村［19］による「内の関係」と「外の関係」に着目した分類に基づいて考察を進めたが，高橋［17］，澤田［16］らの連体動詞句から被修飾名詞への関係付けという視点，そして加藤［14,15］，松本［23］らの文脈や知識の利用に基づく意味的，語用論的な視点からの考察についての検討が残されている。

アイヌ語の連体節に含まれる動詞の単語直接翻訳を変換する処理については，4章の考察は始まったばかりで，今後さらに多くの例について検討し，詳細な考察を進めていかなければなら

ない。今後の課題の中には，次のような問題も含まれる。

①二つの動詞が一つの名詞に並行して係る構造の処理

＜Y779, 780＞tanto pakno yuk somo atte cep somo atte ikkewe anak

今日まで　鹿　ない　おろす　魚　ない　おろす　理由　は

鹿をおろさない　魚をおろさない　理由

鹿をおろさず　魚をおろさない　理由

［鹿を出さず魚を出さなかつた　理由］

これは，否定の副詞「somo」を含んでいるので，その分，処理が複雑になるが，「鹿をおろさない」は［魚］を修飾するのではなくて，「理由」を修飾することを正しく解析して，「鹿をおろさず」という形に変換する処理を考えなければならない。

②位置名詞への連体節修飾の処理

＜Y880＞tane cup ahun kotpoke ta ci kor atuy

日　入る　直前　に

日が　入る　直前　に

［もう日が暮れようとしてゐる時に，私の海へ］

kotpoke：位置名詞：～の直前

このような位置名詞を修飾する連体節修飾名詞句について，位置名詞の前に動詞もくることができると考え，「外の関係」の相対的補充として考察するのが自然なように思われる。

例の記号と出典の対応は次のようである。［Y：アイヌ神謡集（切替［2］);K：切替［3］;E：中川・中本［10];U：中本・片山［11];T：田村［6,7];J：木下・松村・柴田［24];Yは作品番号と行番号，E,U,T,J,Kは通し番号.］

謝辞

アイヌ語の文法および参考文献についてご教示いただいている電子情報工学科切替英雄先生に感謝いたします。また，本研究の一部は，文部科学省補助事業ハイテク・リサーチ・センターの補助金による援助を受けて進められました。

参考文献

［1］アコロイタク　AKORITAK　アイヌ語テキスト1，㈳北海道ウタリ協会，1994.

［2］切替英雄：アイヌ神謡集辞典，大学書林，2003.

［3］切替英雄：アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞，言語研究，No.86, pp.105－121, 1984.

［4］切替英雄：頻出アイヌ語地名の形態論的構造，アイヌ語地名研究3，pp.105－142，アイヌ語地名研究会編，2000.

［5］切替英雄：アイヌ語はどんな言語か　―　一つの派生動詞をめぐって，言語，Vol.14，No.2，pp.60－

66, 90, 1985, 大修館書店.
[6] 田村すず子：アイヌ語, in「言語学大辞典セレクション：日本列島の言語」, 三省堂, 1997.
[7] 田村すず子：アイヌ語沙流方言辞典, 草風館, 1996.
[8] 中川裕：アイヌ語千歳方言辞典, 草風館, 1995.
[9] 中川裕：アイヌ語のArity Calculation, 国文学解釈と鑑賞, 58（1）, pp.163－168, 至文堂, 1993.
[10] 中川裕, 中本ムツ子：エクスプレス　アイヌ語, 白水社, 1997.
[11] 中本ムツ子, 片山龍峯：アイヌの知恵　ウパシクマⅠ／Ⅱ, 片山言語文化研究所, 1999／2001.
[12] 桃内佳雄：アイヌ語・日本語単語直接翻訳における名詞並びの処理について, 北海学園大学工学部研究報告, No.30, pp.165 - 181, 2002.
[13] 奥津敬一郎：連体修飾とは何か, 日本語学, Vol.23, No. 3, pp.6－16, 2004.
[14] 加藤重広：日本語修飾構造の語用論的研究, ひつじ書房, 2003.
[15] 加藤重弘：連体修飾の語用論, 日本語学, Vol.23, No. 3, pp.28－38, 2004.
[16] 澤田和浩：連体動詞句研究の検討－高橋太郎1979を読む－,「鈴木泰・角田太作：日本語文法の諸問題, pp.219－238, ひつじ書房」, 1996.
[17] 高橋太郎：動詞の研究　動詞の動詞らしさの発展と消失, むぎ書房, 1994
[18] 田窪行則編:「日本語の名詞修飾表現」, くろしお出版, 1994.
[19] 寺村秀夫：「寺村秀夫論文集　1　日本語文法編」, くろしお出版, 1992.
[20] 寺村秀夫：日本語の文法（下）, 国立国語研究所, 1981.
[21] 益岡隆志：日本語文法の諸相　第16章, くろしお出版, 2000.
[22] 益岡隆志, 田窪行則：基礎日本語文法―改訂版, くろしお出版, 1992.
[23] 松本善子：日本語名詞句構造の語用論的考察, 日本語学, Vol.12, No.12, pp.101－114, 1993.
[24] 木下順二・松村明・柴田武　監修：小学国語（1上～6下）, 教育出版, 1983.